

合に比べれば、その過程で飼料価値の低下するのは免れないように思われるが、これら冬季飼料は濃厚飼料と充分代替利用し得るものと考えられる。

乾草とサイレージのいずれを用いるべきかは現行の調製方法の難易を考える時、サイレージに極力依存することが望ましい。

水田裏作における飼料作物の混播について

浅野清美・安田捨己

(宮城県農試)

1. 緒言

宮城県の水田裏作は昭和27年を頂点として漸次減少しつつあるが、その阻害要因として跡作水稻の減収があげられ、水稻早植栽培がとくに普及徹底している今日、田植時期に影響することの多い穀作(実取り)裏作は最近大巾に面積が減り、青刈飼料作物の栽培が逐次増加して本県裏作に新生面をひらいており、水田化率の高い本県では水田酪農と直結して、急速にその試験研究の必要性に迫られるようになった。当場では昭和27年から水田裏作の飼料作物栽培試験を継続実施しており、各種の試験結果が判明している。最近(1956~1957年)の2・3の試験結果を要約してその一部を報告したい。

2. 飼料作物間の混播による生育競合

1. 試験方法

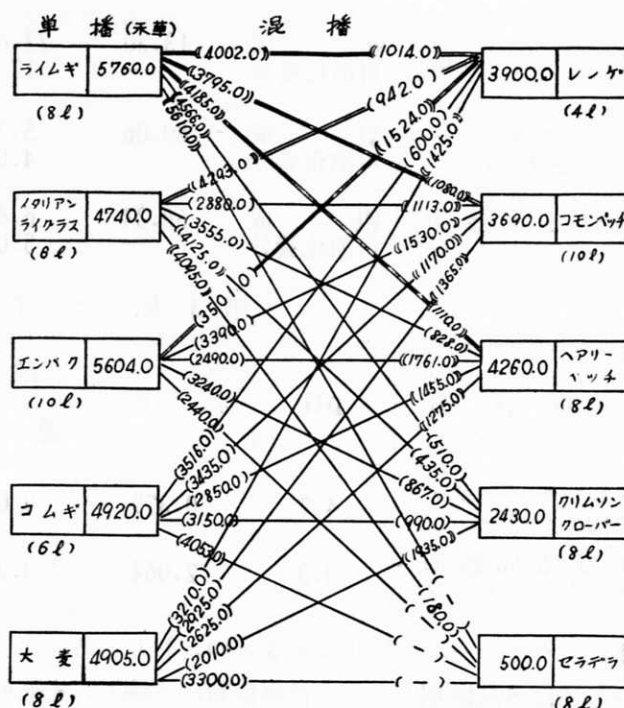
第1図に示した供試作物を10月17日播種、1区面積10 m^2 、2区制、第1圃場使用前作水稻藤坂5号、その他は本場の耕種梗概による。

混播による各作物の生育収量について検討した。

2. 結果及び考察

単播及び混播の茎数の推移を見ると、前者は漸次増加の傾向であり、混播では3月上中旬頃まで増加の傾向を辿り、以後は禾草・荳科草の競合によって弱小分けつは著しく夭折の傾向が認められた。

混播の種類で最も有望と認められる組合せは、レンゲ



第1図. 混播における組合せによる生草重単播(荳科) + ライムギ・レンゲ + ライグラス・レンゲ + エンバク・コモンベッチ + ライムギ・ヘアーベッチ + ライムギである。特にレンゲ + ライムギとレンゲ + ライグラスは多収であり、早刈りが可能である意味で最も安全であろう。

3. ベッチとライグラスとの混播割合及び施肥量

飼料作物の混播でどんな割合に播種され、施肥量はどのくらい必要かについて検討した。

1. 試験方法

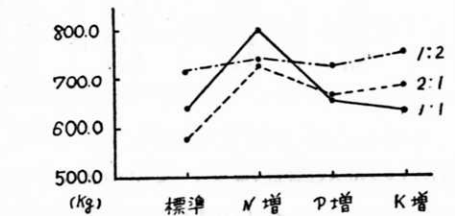
混播組合せ	施肥	標準	N	増	P	増	K	増
ベッチ : ライグラス		7.5:4.53:3.75	15:4.53:3.75		7.5:11.25:7.5		7.5:4.25:7.5 ^{kg}	
1 : 1		2 oo 1~2	2 on 1~2		2 op 1~2		2 ok 1~2	
2 : 1		2 ho 1~2	2 hn 1~2		2 hp 1~2		2 hk 1~2	
1 : 2		2 io 1~2	2 in 1~2		2 ip 1~2		2 ik 1~2	

注：混播組合せは両作物の個本数について、従って播種量は両作物の単位容積または重量当り種子数と発芽歩合とを測定してから決定する。播種期；10月17日 収穫期；5月20日

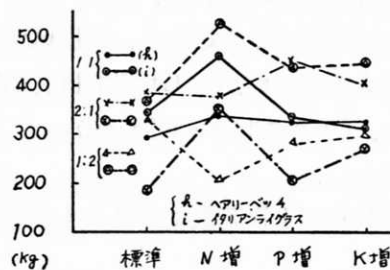
2. 結果及び考察

飼料作物の生育は年末・翌春ともに降水量が少く、生育は相当抑制された。

ライグラスの生育はN増肥ほど生草収量が多く、これに反して荳科草のベッチは、N増肥ほど減収の傾向が顕著に確認された。P・K増ではベッチに増収の傾向が認められ、ライグラスではK増にややその傾向がうかがわれる。



第2図 混播での乾物重比較(総量)



第3図 混播歩合及び施肥量によるベッチライグラスの収量の変化(乾物重)

混播割合については、荳科草1：禾草2の割合が全区を通じ優位を示している。混播の絶対収量を多くするには、ベッチ+ライグラスを1：2の割合とし、P・K増肥によって荳科草の増収を図るのが大筋として考えられる。

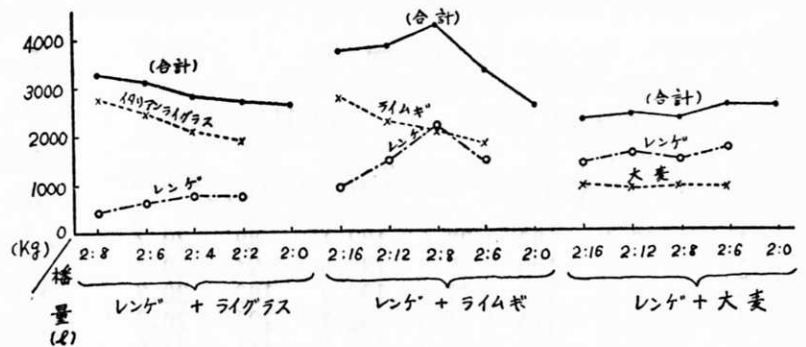
4. 不整地における混播栽培

不整地水田にレンゲ+禾草(ライグラス・ライムギ・大麦)の混播をおこない、生育収量を検討した。

1. 試験方法

第4図に示す試験構成で、1区10m²、2反覆、播種期はレンゲ9月5日・禾草は9月25日(レンゲは立毛間、禾草は刈取り直後散播圃場は前項試験と同様に本場第1圃場を使用した。

2. 結果及び考察



第4図 紫雲英に対する禾草混播の生草量比較

総体的に生草収量を検討すると、レンゲ+ライムギが収量が多く、他はやや劣った。一般にレンゲの収量減は禾草の増播による抑制のためと思われる。単播レンゲよりも混播区の全収量が優ることは前項試験結果と同じ傾向である。不整地水田裏作での組合せはレンゲ+ライムギが優り、播種量としては2ℓ：8ℓ位が飼料作物の生育競合も良いことが認められた。

青刈ライ麦に対する追肥及びジベレリン撒布効果

高 橋 英 一

(秋田県農試)

積雪期間の長い地域で春早くから生草を家畜に与えることは極めて有意義であって、このためジベレリンを撒布して刈取日を早められるかどうかを知るため試験を行ったので、その結果を報告する。

1. 試験方法

供試品種：ペトクザー、壟巾：180cm、播巾：160cm、播種量：a当り1080cc、播種期：昭和33年9月23日、施

肥量(基肥、各区共通a当りkg)：硫安1,875・過石2,625・塩加1,125・炭カル11,250。追肥及びジベレリン施用日：3月31日。供試ジベレリンは武田ジベラ錠、濃度は50p.p.m.とし、a当り6ℓの割で葉面撒布した。

1区面積及び区制：1区15m²、3連制。試験区構成は第1表に示すとおりである。

2. 試験成績